

【表紙】

忠臣蔵 全六巻

【表紙裏】

【1頁】

(発声フィルム式)

忠臣蔵

全六巻 六三九米

台湾総督府

P第三五八号

検閲済

有効期間

自昭和十七年三月二十日

至昭和二十年三月十九日

活動写真「フィルム」検閲

規則第十条第二項ニ依リ

手数料ヲ免除ス

障害ナシ

【2頁】

【3頁】

赤穂義士誠忠録

忠臣蔵 〳〳〳梗概〳〳〳

勅使幕府御来向に際し赤穂の城主浅野内匠頭守は接待役を仰せつけられたが師匠番たる貪欲上野の意を計り兼ね贈与せざりしたため隠忍自重よく上司の命を乞ふたが反って散々罵倒嘲笑をうけ殿中をも顧みづ遂に武士の面目と武門の屈辱に忘我一刀を上野の頭に加へたが果さず恨みをのみて田村邸に散り行くと〳〳に赤穂は離

散し残った同志の者は僅かに五十人ばかりであった。家老たりし忠臣大石は仇討の本心を秘めながら周囲の迫害をうけ流しつゝ涙を呑みて妻子を離散せしめあくまでも敵の油断をはかった。遂にその苦心も耐られる時機到りて元禄十四年十二月十四日降りしきる雪を溢るゝ赤誠の血に染め遂に上野の首をあげて意気高らかに両国橋に引き揚げるまで武士道精神を推けるもの。〳〳〳梗概終り〳〳〳

1.

【4頁】

【5頁】

字幕

1、赤穂義士誠忠録 忠臣蔵

2、テラダ映画提供

3、徳川氏が天下を掌握してより五代、世は漸く泰平に馴れ、驕会に耽り、遊

□に流るゝ元禄の頃

4、突如天下を震□せしめたる赤穂義士の壮挙こそ実に青天の霹靂であり、武

士道未だ地に落ちず

5、その誠忠は千古不滅の亀鑑として朽ちず偉大なる日本魂の発露である

2.

【6頁】

6、元禄十四年二月四日、毎年正月には幕府から金幣を朝廷に奉り、又朝廷

からは勅使を下し給ふが慣例であった

7、幕府では当年 播州赤穂の城主浅野内匠頭及豫州吉田の城主伊達右京亮の

二人に勅使饗応の係りを、

又、この指導役に高家の筆頭吉良上野介義央に任命した

8、かくて三月十一日、主上東山天皇は柳原権大納言高野中納言を、また、

霊元上皇よりは院使清閑寺権中納言卿が傳奏使として御到着

9、四十年の久しき間、幕府典札故儀に通曉するを奇貨として、贈賄の軽重に

依りて公労を歪むる老獪貪欲な吉良上野介

【7頁】

市家老藤井又中、安井彦右の主木末、氣實知もず大事を叩カモ

しつわあわ。

9、されど内匠頭只管に耐えて明日は將軍家勅旨に答へ參らせ  
て朝廷奉戴の誠意を表し奉る三月十四日。

10、此の日の鄭式は総じて正月九日の拝賀式に準ぜられ素祐大  
紋服装の総登城であつた。

11、浅野候はまだ御登城か。

12、彼の人の御役怠慢で吉良も迷惑致して居ります。

13、御服装が違ひます。

3.

【8頁】

14、昨日吉良奴何と云つた。

15、明日の服装の儀は例年の如くにムリませうな。

16、いや、素袍大紋でおぢやらぬ麻の袴……な麻の袴ぢや

17、では例年と事替り。

18、勅使様原郷より特に仰せ出でにムる。

19、お茶坊主に注意されて引退る正史饗応使の態たらく御覧な  
されたかあれじゃ今日の大役勤まらぬ誰か替つてあげな  
さい。

20、浅野殿病氣とでも申し上げてな。

【9頁】

21、昨日吉良殿が例年と事替り本年は袴と申し傳へらしを直実  
にうけて松の廊下に到れば

22、何れも大紋烏帽子ッ

23、源吾右エ門殿氣付により御儀式用意致し置きましてムリ  
ます。

24、何れも早や時刻で御座る御出迎ひの御用意。

25、して御勅使御着の時刻は？

26、今ニ夕時は有る筈の教ぢや

27、吉良殿の御教には是迄教度の手違ひムります。

4.

【10頁】

御油断あらせられますな。

28、今日の御役目勤まるも其方達在ったりやこそ。

29、御腹立ては御尤もなれど今日一日の御堪忍

30、安心してくれようつく心得て居る。

31、さらば。

32、勅使御成りの刻限にはまだ二時もあるそれにしては、？

33、内匠頭様……御奉答の御式は……

34、相済みました様子……

35、早や御能へお成りの御様子

【11頁】

36、誰ぢや、誰方ぢや。

37、勅使饗応役たる其処許が昼寝してわせられたとは応外千万  
な。

38、お寺坊主誥めませい。

39、御役目は大切にせねばならぬ浅野殿見習ふまい。

忠臣蔵 第一巻 終  
第二巻

1、足らはぬながら芥此の度の大役おろそかには致し申さぬ。

5. されど今日の御教へ何事も齟齬して此の始末。

【12頁】

2、狼狽へらたか内匠頭今日詔候に指揮せし吉良の指に間違あ  
らば御一統晴れの座に居合せられる筈……な……それを  
を衣服を間違時刻を違へられたは貴殿一人

- 3、殿中で御座るぞ。
- 4、刀に手を掛け吉良を斬る気か。
- 5、御役怠慢の其許を急に病氣と御上を取りなした親切者の吉良を上野之介を貴殿は斬る気か。
- 6、吉良殿本日拙者の残る役目如何致して宜しきや御傳授お願ひ申す。

【13頁】

- 7、貴殿は先日より度々の不行届と手違ひ指図役の手前が落度とも相成る。
- 8、今日大礼の御儀など伊達殿同様心得あるべき筈常に与礼書の一冊位は読んで置かれい。
- 9、馬鹿なッ
- 10、伊達殿は理滄だそれに引かへ
- 11、御身の様な暇人ヒヤシヤシではない御用繁□でムる 離されい
- 12、御……御傳……授……を
- 13、御身等勤まる御役ではないわ。
- 6、

【14頁】

- 14、離せ。
- 15、此の程よりの遺恨。
- 16、覚えたか。
- 17、武士の情けぢや放されい。
- 18、今一太刀を赦されい。
- 19、各々方内匠頭は狂気ではムらぬ御手をゆるめられい。
- 20、静かに御上の御意に従ひ申す。
- 21、各々方静まり候へ。
- 22、立騒いでは御勅使に無礼でムらう

【15頁】

- 23、各部署につき候へ。

- 24、何者だ。
- 25、吉良様で御座ります。只今浅野の御刃傷に依りまして
- 26、式礼紋モンドコロ処を血で汚すは近頃以って。
- 27、仮令大学様御座りませうとも御錠口押して御通りなさいますこと適ひませぬ御用御座りますれば御取次。
- 28、愚者奴大度出来と心得ぬか。
- 29、嫂上！嫂上！大変に御座る。内匠頭が松の廊下で吉良殿に刃傷ッ！
- 7、

【16頁】

- 30、して吉良殿は？
- 31、御場所柄と之ひわけても今日大切の御式日に刃傷遊ばす事よく／＼御堪忍なし難い仕儀なうては適ひませぬ悠みの御方首尾よう御仕止めあらせられましてかそれとも吉良殿の御傷どうムりまする。
- 32、二つない御命まった赤徳五万三千石引替の御覚悟あらせられたお兄上様御怨み籠る傷の次第も大学様は御確かめあらせられぬ。
- 33、主家興亡の岐路に立ち混乱に陥った鉄砲州御屋敷を後に本

【17頁】

- 国赤徳へ使するは忠義一口の管野三平、速見藤尤エ門
- 24、家康以来喧嘩両成敗片手落の裁きあつた例ない然るに將軍綱吉の激怒と大老柳沢の吉良最貞とは上野介に何んの御咎めもなく仮そめにも一城の主に審問の儀もあらで即日切腹仰付らる。
- 35、片岡源吾エ門殿ムりまする。
- 36、今世の御対顔かなひまするは源吾一人にムりまする。
- 37、其方が忠々しい姿を見るもこれを限り酬ひられぬ忠義南

- 3 8、酬ひられる事あるを予期し忠義を致す者ムリませぬならば
- 8、

【18頁】

殿様御供仰付られ何処までも御慕ひ申上げます。

忠臣蔵 第二巻 終

第三巻

- 1、源吾エ門忠義皆が忠義天晴れ忠義者に離散の憂目を見せるも内匠頭不徳の致すところ。
- 2、いづれも武運つたない星の下に生れ合せた。
- 3、源吾エ其方に頼み置く予が生害の九寸五分は内蔵に遣身ぢやと。
- 4、源吾エ堅固で暮らせ。

【19頁】

- 5、主家興亡の一大飛報早打もつて速見藤左エ門と管野三平江戸から赤穂百五十里を四日半にてぶつ飛ばす
- 5、奥誘小花よりも又我は口春の名残を如何にとやせん。
- (画中文字 短冊)
- 6、小田原で馬のり捨てた管野三平、速見藤左門十五甲の末。申には箱根の口を車や越へぬ。
- 7、箱根の口も早や越えて。
- 8、一大事出来！

- 9、お役目はまだ済まぬ。
- 10、手当てをして進ぜい。
- 11、家中総登城を布れられい。
- 9、

【20頁】

- 12、画中文字「手紙」
- 13、此の上は如何遊ばす 御存意か。

- 14、お察し下されい不肖大石只茫然
- 15、御思案も成り兼ねると云はれるか。
- 16、良雪殿

17、この時に当って臣の取る可き道唯後李のために。

18、流石は大石殿夜の行燈に灯は消えぬ。

19、君辱かしめらるれば臣死す。

20A、申上げるも涙ながら御主君には田村邸に御切腹御家名断絶

【21頁】

国郡没収の御沙汰ムった 20B、此の上は一期の覚悟御主君の御名を汚さず我等処置の謬まらざるよう□と御思案。

22、殉死 殉死

23、誰彼の意見と云はうよりこの九郎兵エは先ず城代家老たる内蔵の思案承はらう。

忠臣蔵 第三巻 終

第四巻

- 1、御一統の魂拜見仕り度い。
- 2、御舍弟大学長広様を以って由緒ある御家名を存せんこと本
- 10、

【22頁】

領の第一。

3、其の手段只一つある！家中一同が結束して公儀嘆願申上げる。

4、念願達せぬその時は一統死を期したって強訴

5、そりや悪かるうー死を期し強訴とは事穏便でない御本家安芸守様に御咎めあらば何とする。

6、強訴御取り上げなきその時は、

7、天下の勢を迎えて一戦なし矢弾尽き刀折れなば潔く城を枕

に打死致すこそ武士の本義と心得る。

【23頁】

8、常日頃に似ぬあわてた論ぢや！血の気の多い手合を扇動オダテること口にすまい

9、内匠頭様刃傷に及ばる事よく／＼堪忍なし難い恥辱受けさせられたるによる。然るに君は御切腹相手たる吉良殿には

何の御咎めもない恐乍ら斯程に片手落の裁判サバキ亦あらうか。

10、我等今日の御奉公一重に修羅の亡君を慰め奉るにある。

11、幕府に弓引くそれが内匠頭様御無念を雪ぐ足し前にでもなるかな。

12、先君御修築なされ御息かゝりある当御城を我等手をつかね

【24頁】

て幕府に引渡すこと泉下に於ける覚召の程も如何あろうと存ずるが。

13、我等当お城と運命を共にし死を軍馬の間にさらさば天下の人始めて浅野身内に義を知る武士多くあるを知るでムらう。それこそ内匠頭様へせめても手向けかと存ずる。

14、血迷った事云ふまい我等反対ぢや。

15、公儀御咎めを掌る事すまい御本家へ対しても避けねばならぬ城地受取の役人衆入らせられぬ間に御用金御配分なされはとうムる。

【25頁】

16、御当家お遺身それを生命に露命繫がば一生君を戴く事になる

17、黙れ！ 弱虫 玉虫

18、公儀嘆願に同意せず殉死に逃を打つ卑怯者退れ 退れッ

19、卑怯者とは何だ血迷ひ者やつが差出な

20、大野玉虫退散せいー退散せいー

21、籠城ー殉死ー復讐ー、三変、四転 四月八日、再度の

大評定に約を違へず列席したる者僅に六十三名

22、暫らく待れい！一期の相談残りある。

23、腹切つて亦生き還る術あるか上野之介の首挙げ亡君お側

【26頁】

に参ずる日まで内藏之助預り置くと、血判加盟

24、越えて四月十八日城地受取の上使を迎える。

25、御先祖代々

26、我々も代々

27、さあ参らう。

忠臣蔵 第四卷 終

第五卷

1、京、島原の月 祇園の花 憂身をやつす内藏之助。人の誇りもなんのその酔に隠れて只管復讐の計画を進めた。

【27頁】

2、さても豪奢な御遊興お大臣はと人間はゞ

お、手の鳴る方木

4、掬まへて盃ちや

5、吉田忠左衛門汝も性根が腐ったなッ

6、十月六日気運熟すー山科浪宅で東下りを決心した内

藏之助、愛別離苦の裡に妻子を但馬国豊岡の実家石塚五

兵衛の許へ。

7、御父上 御父上

13.

【28頁】

8、主税お願が御座います

9、せめて母様に御本心を

10、馬鹿

11、未さがりの雨やまず愛憎もこそも尽き果てたと悪態吐いて離縁を迫ったお陸三下り半を受取れば未来永劫切れま

じと契った二人がお互ひの心と涙は見えぬ様胸に納めて。

12、祖母様や母様と一緒に但馬へ行きます。

13、豊岡へ帰ったなら祖父様や祖母様の言ひ付けよう守って偉い人にならねばならぬ。

【29頁】

14、では豊岡へ行ったならお父上にはもう逢へぬので御座いますか。

15、では私等が母様に謝って上げませうそうして一緒に但馬へ帰りませう。

16、私達が去った後何事も父上に従ふて。

17、よい放蕩物になるがよい。

18、一切が捨身。

19、内匠頭様御愛用の佩刀

20、万山不重君恩重一髪不軽我命軽

14.

【30頁】

21、斯くて翌年十月七日内藏之助は、潮田、近松、菅谷、

速水、其の他九名の同志と共に日野家用人垣見五郎兵衛と名乗り悠々東へ下った。

忠臣蔵 第五卷 終

第六卷

1、元禄十四年十二月十四日朝まだきより降りしきる雪に大

江戸は一望の銀世界と化した。

2、時機到る其の夜半雪を跳たて、四十七人本所松阪町吉良

邸表、裏門より打入

3、静寂の寒気を破る山鹿流の陣太鼓

【31頁】

4、合図の呼子だ。

5、吉良殿が知れた。

6、本懐遂げて引揚 両国橋

7、待て／＼……？早朝異形の風態してあるさへ心得ぬに多人

数隊をなして当御橋を押し渡るは何者だ。！

8、これは故浅野内匠頭長矩が家来亡君の仇吉良上野之介殿を打ち奉り只今内匠頭菩提所高輪乗岳寺へ罷り越し亡君御墓前にて切腹を遂ぐる存意それ故罷り通った次第に御座ります。

15.

【32頁】

9、高輪に打越ゆるに□□見よ永代橋が架りあるではないか  
早々引返せ！

10、御目付服部市郎右エ門これにあるからは槍先に懸けても通すこと罷りならぬ

11、諸侯登城の大手筋当橋の固め押破らばお上に弓引く謀反人となるを心得ぬか？

12、これは田舎侍の存ぜぬ事として危なく慮外相働き申可き処よ  
くぞお心づけ下し置れた。

13、さらば各々引返し候へ。  
—忠臣蔵終り—

【データ採録者…加藤宏明】

【データ校正…笠原亮介】